

十字架の左側と右側

牧師 山本 護



集会所扉の曲線は無理を言って造作してもらったものですが、イマジネーションが喚起される額縁として自然の奥の間を見せてくれています。この時は扉の開け具合によって、額縁内の風景と室内の光が乱反射していました。複数の焦点でめまいを感じ、ふいにキリストのつかみどころのなさを覚えました。

律法の抵触じゃないか、とファリサイ人が文句を言い(マルコ 2:24)、イエスは切り返します。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない(マルコ 2:27)」。一方でまた弟子たちにはこう言います。「もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても全身が地獄に投げ込

まれない方がましである。もし右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても全身が地獄に落ちない方がましである(マタイ 5:29~30)」。

前者は人間の生を、書かれた律法よりも優先しています。後者はいくらかの比喻であるにせよ、人間の実情よりも律法の完全な履行を述べている。これまで自分の期待も投影して人間イエスを思い描いていましたが、力を抜いて描き直してみると、イエスの輪郭線が錯綜して像が定まりません。あたかも額縁内の自然と室内光が乱反射するごとくに。

カトリックの哲学者 J.ギトン(1901~1999)はこう語っています。「バランスと単純さをもったあらゆる教説は、右側には極端な厳格さを生むとともに、左側には、それを解体しかねないような、四方八方への弾力性を生むものである。この両方の行き過ぎは、キリスト教そのものの出発からして発見できる(異端と公会議)」。両端を含んだ「キリスト教の出発」とは、言うまでもなく十字架でありましょう。

十字架は教会の出発点ですが、同時に遡行点でもある。十字架には人間イエスへ遡る力も働いています。それがイエスにおいて社会の「左側」に現れたり、時には「右側」に現れたりする。多くの教会は世にあってそれなりに定着しているので、摩擦が起きないほどほどの所に調和のイエスがおられるでしょう。とはいえ教会は、右側の「極端な厳格さ」と、左側の「解体しかねない弾力性」を長い棒先に抱えていてこそ、ヤジロベエのように揺れながら安定します。

初夏の午後 5 時。額縁内の風景が交じり合い、光が乱反射していた集会所。これは十字架の「ことば」なのかもしれない、と予感させられた奇妙なひとときでした。Ω